

## ラグビーにおける得点パターンの検討

下園 博信<sup>1)</sup> 村上 純<sup>2)</sup> 佐々木 康<sup>3)</sup> 山本 巧<sup>4)</sup> 古川 拓生<sup>5)</sup>

### はじめに

最近の傾向としてボールゲームに関するチームプレーや戦術の分析は、得られた情報を駆使してチームや対戦相手の特徴を明らかにし、チーム力の向上に貢献すると考える。

ゲーム分析については、従来行われてきた量的な分析（単純にプレーを数値化するような分析）から、プレーの内容を確認していく質的な分析（プレーの内容や戦術に沿ったプレーが出来ているかなどを数値化するような分析）を行うスタイルが主流になりつつある。例えば単にパスの成功率が何%であったかではなく、どの場面でどのようなパスが行われていたかなどを詳細に分析することにより、具体的なプレー改善に役立つ情報を抽出するのである。このような質的な分析を通してチーム力の機能を高め、さらに個人のプレーの習熟度を増し、プレーの高度化を誘引していくことになる。その中の一つとしてラグビーフットボールにおいても質的な分析を駆使した報告がある。「2007ワールドカップ総括（日本ラグビーフットボール協会）」では、世界のラグビーの傾向について、プレー分析を行い、「堅牢化する防御と対抗しうる攻撃」、「着実な地域戦略」などゲームの局面をデータ化し、世界のトップチームがどのようなゲーム構造を持ちゲームパフォーマンスの質を高めているのか提示している。また、2009年の日本で開催されたJWC（ジュニアワールドカップ2009）の分析結果ではジュニアレベルの世界的なプレー傾向を「高速化」、「情報化」などの項目でまとめ、日本ラグビーの強化方策に

ついて示している。

以上のような事を踏まえて、本研究ではラグビーの得点場面に着目し、得点に関するいくつかの要因を取り上げ、質的なプレー分析を行い日本国内のリーグ（ジャパンラグビートップリーグ）とテストマッチ（国際試合）の得点状況について検討した。

### 方法

無作為に09-10シーズンのジャパンラグビートップリーグ（以下JT）の20試合と09シーズンのテストマッチ（以下TM）20試合を選び、DVDに収録された映像を分析した（表1）。

分析項目は得点にかかわるプレーについて、回数、時間帯、セットから得点するまでの時間、得点に関わるスタートプレーが行われたエリア、攻撃の起点である。

### 結果と考察

#### 1) 勝敗別による平均得点について（図1）

勝敗別に得点の差を比較したところ、勝ちチームの平均得点はJTが34.5点、TMが27.8点であった。負けチームの平均得点はJTが17.7点、TMが15.6点であった。しかし、勝ちチーム、負けチームの平均得点ではJT, TMの間に有意な差は見られなかった。このことについてはJT, TMともに得点についての差がなく、質的な分析をすることで得点状況の特徴を明確化できることを示唆している。

表1 分析対象ゲームについて

対象ゲーム	分析試合数	シーズン	分析映像
Japan Rugby Top League	20	09-10 (9月~12月)	J-sky sports 放送映像
Test mach	20	09 (2月~11月)	J-sky sports 放送映像

2) 得点プレーの平均回数について

得点プレーはトライ、トライ後のコンバージョン、ペナルティキック、ドロップゴールの4種類で比較した。トライ、コンバージョンにおいてはJTが有意に多かった。ペナルティゴールはTMが有意に多く、ドロップゴールは有意な差は見られなかった。得点内容については先行研究と同様に国内のゲームではトライが多く、テストマッチでペナルティゴールでの得点が多くなる。国際試合においては、個々の高い防御力と統制された組織防御によって、攻撃側はトライをすることが難しい。そこで、相手の反則を確実に得点につなげるペナルティゴールの得点が多くなっている。JTにおいては、勝ち点制を導入しており4トライ以上でポイントの獲得ができる。試合に負けていても積極的にトライを取りに行くチームも少なくない(図2)。

また、勝ちチームにおいては上述した通りの結果であったが、負けチームのJTとTMの比較では、ペナルティゴールのみTMが有意に多かった(図3, 図4)。ラグビーの醍醐味はトライによる得点プレーと考え

ても良いが、国際的な試合における得点の多くは、ペナルティゴールが主となっている。日本国内でもペナルティゴールの精度を向上させる試みや、敵陣での得点機会を確実に得点することを重視した戦術を考える必要がある。

3) 得点に至るまでの時間について(図5)

トライに関わるプレーを起点となったプレーからトライまでの時間を測定した。JTは25秒以上かけたトライが80%を超えている。TMは25秒以上が約40%で、0~15秒までのトライが40%強となった。JTに関してはセットからトライを取るまでに、相手の防御を崩す時間が長くかかっていることと(攻撃回数が多い)、ラインアウトからのモールでトライをすることが多いので、25秒以上の得点が圧倒的に多いと考えられる。

4) 得点に関わる攻撃エリアについて(図6, 図7)

得点したプレーの起点がどこにあったか、ゴールラ

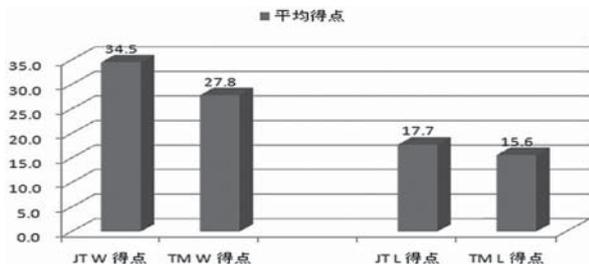


図1 JT, TMの勝敗(勝=W, 負=L)別による得点の平均値

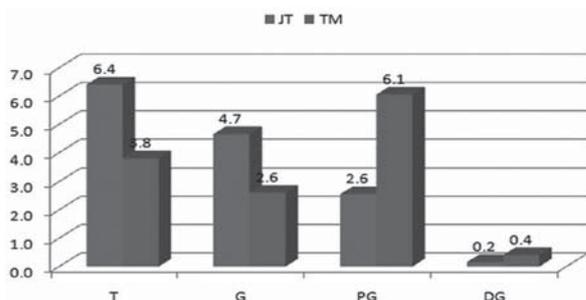


図2 JT, TMにおける得点プレーの平均回数

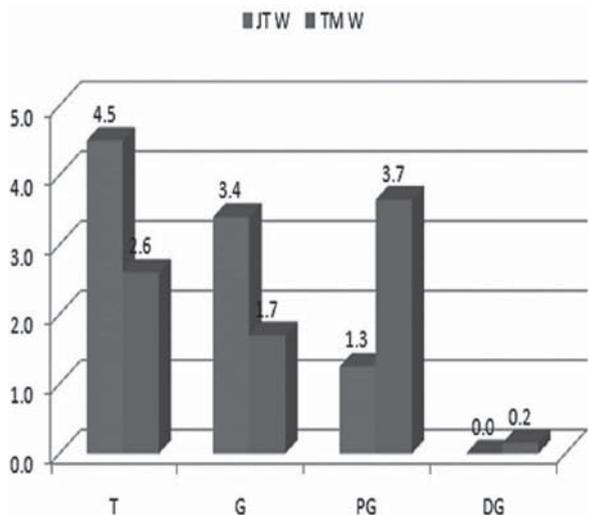


図3 JT, TMにおける得点プレーの平均回数(勝ちチーム)

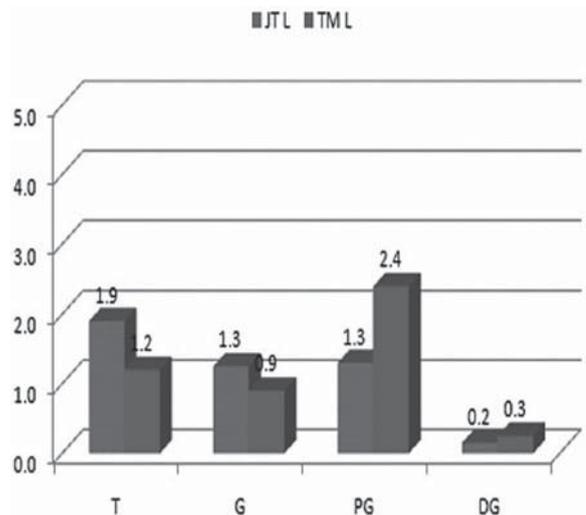


図4 JT, TMにおける得点プレーの平均回数(負けチーム)

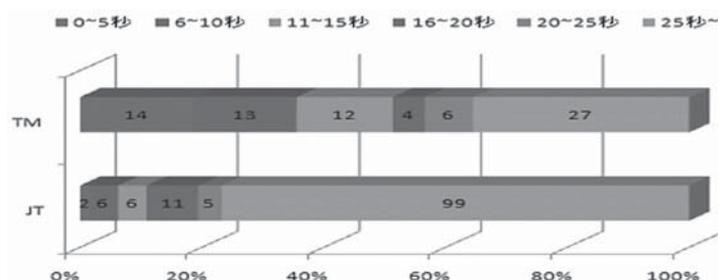


図5 JT, TMにおける得点に至るまでの時間

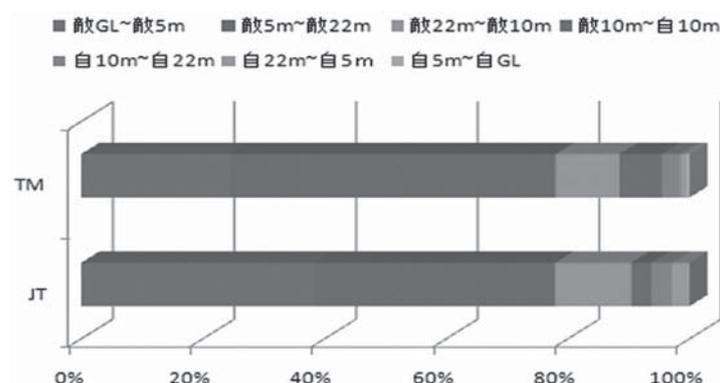


図6 JT, TMにおける得点に関わる攻撃エリア (G~G)

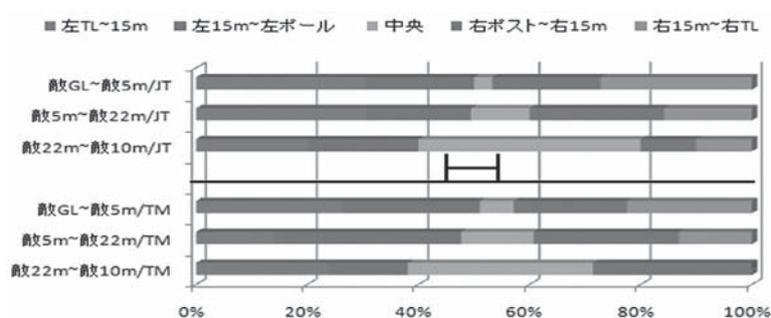


図7 JT, TMにおける得点に関わる攻撃エリア (T~T)

インからゴールライン (G~G) まで7区分、タッチラインからタッチライン (T~T) を5区分して分析した。G~Gの分析では、敵陣ゴールラインから22mまでのエリアからの得点がJT, TMともに約80%となっている。しかし、JTは敵陣ゴールライン~敵陣5mと敵陣5m~敵陣22mではほぼ等しい割合であったが、TMにおいては敵陣ゴールライン~敵陣5mが25%、敵陣5m~敵陣22mが50%となり得点したプレーの起点に違いが見られた。ペナルティゴールからの得点が多いTMにおいては、ゴールラインから離れていても得点につながっている。また、ゴールラインに近づくほど防御力も上がって、得点に結びつかないことも推測される。またT~T方向のエリアにおいて

もJTは左T~15m, 右T~15mから得点が多くラインアウトからのモールドライブで得点している回数が多いことを示している。TMにおいてはゴールラインから中央エリアからの得点が増えている様に、ペナルティゴールを狙いやすいエリアでの回数が多い結果であった。

#### 5) トライに関わる攻撃起点の分析 (図8)

トライに関わる攻撃起点を分析した結果、本研究では8起点が確認できた。SC/スクラム, LO/ラインアウト, CA/カウンター攻撃, TO/ボールターンオーバー, KOR/キックオフリターン, DOR/ドロップアウトリターン, PK/ペナルティキックからショートキック

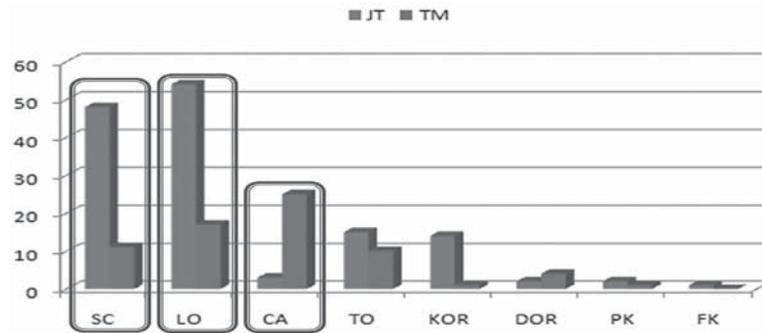


図8 JT, TMにおける得点に関わる攻撃起点

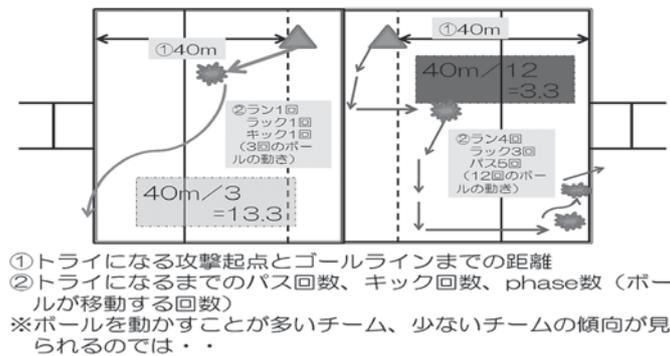


図9 得点状況の数値化（提案）

ク、FK/フリーキックからショートキックであった。JTはSC, LO, KORからの得点が多いが、TMはCAからの得点が多い。JTにおいては、ラインアウトからモールドライブ、スクラムのドライブなどセットプレーが有利なチームは敵陣ゴールライン付近での攻撃が有利な状況であり、この結果が妥当だと思われる。TMではセットプレーからの防御は簡単に崩すことができず、防御に隙ができる相手のキッキングプレーからのカウンター攻撃において、トライを多く挙げている。

### まとめ

本研究ではラグビーの得点状況を検討することを目的とし、ジャパンラグビートップリーグ（JT）と国際テストマッチ（TM）をランダムに選び（20試合）分析し、検討した。

特徴的であったのは、以下の3点であった。

- ①JT, TMともに20試合の平均得点に差が見られなかった。
- ②JTはトライとコンバージョン、TMはペナルティゴールでの得点が多かった。
- ③JTとTMの得点状況から、国際ゲームでは「防

御力」が高いことが推察された。

日本ラグビーフットボール協会が発刊している「ラグビー科学研究」においても、毎年ゲーム分析の結果が提示され、“プレーの質”をどのように分析し、現場へのフィードバックを試みるかという事が考案されている。本研究においても今回の分析方法と結果を踏まえ、得点状況をさらに効率よく分析する方法についても検討しなければならない。そこで、得点プレーに関わるいくつかの要因を整理し、得点プレーの起点がある位置とゴールラインを基準に、得点状況を数値化することを提案する（図9）。今後の研究課題として取り組み、方法や結果について報告できればと考えている。

### 文献

- 佐々木 康・山下修平・古川拓生・下園博信・他18名（2008）2007ラグビーワールドカップ総括。ラグビー科学研究，日本ラグビーフットボール協会。19（3）：3-12。
- 佐々木 康・青石哲也・下園博信・他18名（2010）JWCにおけるトライ・攻防・戦術構造。ラグビー科学研究，日本ラグビーフットボール協会。21（2）：21-34。
- 下園博信（2007）スポーツ現場におけるビデオ映像のさまざまな活用法。体育の科学，57（8）：623-626。